

－目黒のサクラ再生実行計画－

「九品仏川緑道 サクラ再生実行計画」(概要版)

令和3年3月 目黒区



－内容－

| | |
|-----------------------|---|
| ■ サクラ再生実行計画の考え方 | 1 |
| ■ 概況 | 1 |
| ■ 現地調査会の開催とニュースレターの発行 | 1 |
| ■ 桜の樹木診断結果 | 2 |
| ■ 桜の土壌基盤調査結果 | 2 |
| ■ 現状の問題点の整理 | 3 |
| ■ 九品仏川緑道の桜の植栽計画 | 4 |
| ■ 桜並木の将来像 | 4 |
| ■ 維持管理計画 | 6 |
| ■ 協働作業の考え方と役割分担 | 7 |

■ サクラ再生実行計画の考え方

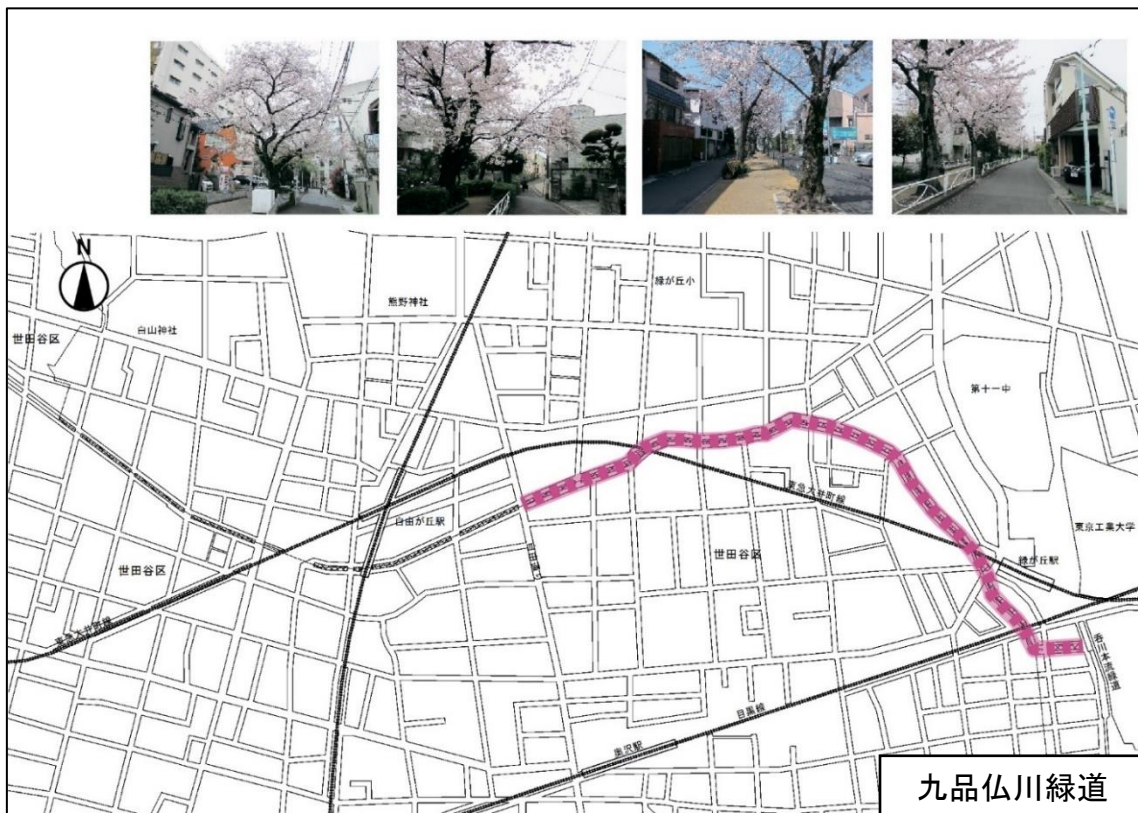
桜は日本を代表する花として広く親しまれているが、高齢化や生育環境の変化から樹勢が低下し、倒木や枝折れが懸念されている。

緑道内にある桜について現状の課題を整理し、桜並木の将来像や保全策について住民と協働で検討を行い、中長期的な視点に立ってサクラ再生実行計画を作成する。

■ 概況

九品仏川緑道は、昭和49年(1974年)に「九品仏川」へコンクリートの蓋を被せ、その上に土盛りをし、緑道として整備された。自由が丘駅方面から緑が丘駅を通り、呑川本流緑道をつなぐ延長約921.4mの道のりには桜が116本植栽され、地域のシンボリックな桜並木として長年住民に親しまれてきた経緯がある。

桜の品種はソメイヨシノが主体で、一部オオシマザクラ、カンザン、アマノガワが植栽されている。緑道の幅員は2.5～3m内外で、大木化した桜が根上りをおこし舗装や縁石が破損し、桜も巻根をおこしている箇所もある。そのほか腐朽菌の病害や穿孔虫被害、剪定痕からの枯れ下がりなどで樹勢の衰退が目立ち、桜並木を今後も維持するには対策が必要な状態にある。



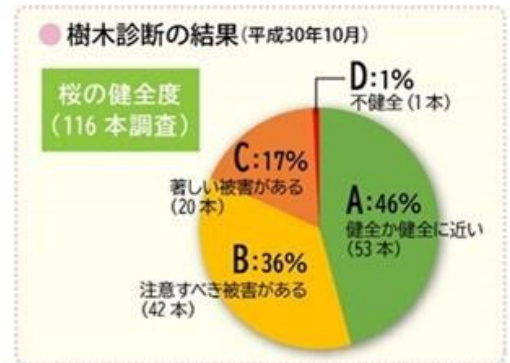
■ ニュースレターの発行と現地調査会の開催

令和2年9月から令和3年1月にかけて「目黒のサクラ再生実行計画 九品仏川緑道ニュースレター」を3回発行、「九品仏川緑道現地調査会」を1回開催し、意見募集を行い、住民意見を交えて桜の将来像について検討した。

| 発行・開催 | 名称 | 内容 |
|------------|------------|--|
| 令和2年9月 | ニュースレター第1号 | ・九品仏川緑道の桜の現状と課題、樹木診断と土壌調査結果報告、現地調査会案内 |
| 令和2年10月22日 | 現地調査会 | ・桜が抱えている問題、人工地盤上の植栽特有の課題、改善策についての紹介 ・区民からの桜並木へ想いや将来への要望、桜についてのアンケート |
| 令和2年11月 | ニュースレター第2号 | ・現地調査会開催報告、アンケート結果と意見紹介、桜景観の再生方針提示 |
| 令和2年1月 | ニュースレター第3号 | ・九品仏川緑道サクラ再生実行計画（案）提示 |

■ 桜の樹木診断結果

平成30年度桜の診断は116本、うち健全度の判定がA（健全か健全に近い）53本、B（注意すべき被害がある）42本、C（著しい被害がある）20本、D（不健全・枯死）1本であった。

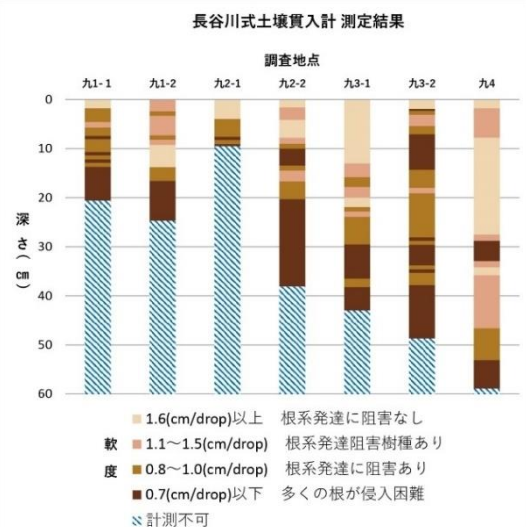


■ 桜の土壌基盤調査結果

九品仏川緑道は、コンクリートの蓋の上に土を盛った人工地盤上に作られており、根の生育範囲に制限がある。樹木の生育不良が土壌に起因すると類推した3地点と、比較的生育の良好な地点を対照区として1地点選定し、土の性質と桜が根を張る範囲の土壌の硬さを確認した。

桜の衰退が甚だしい地点は雨の後でも土が乾いて締め固まっている。触るとざらざらして粘土分が少ないため、腐植があっても団粒化せず土の保水力と保肥力が乏しい。

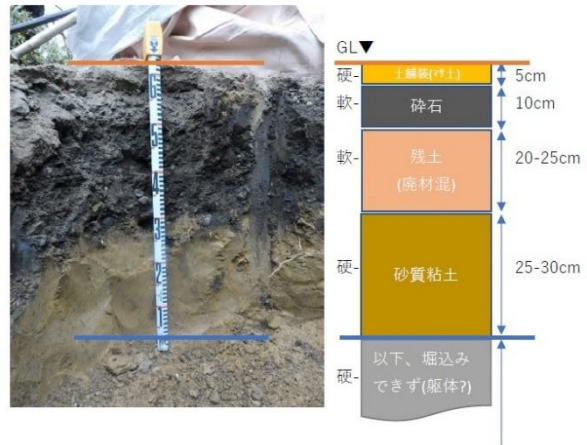
高木の根は、深さ60cmから1mまでの間に大部分が広がり、地上部を支え、水や養分を吸い上げる。しかし九品仏川緑道では根の進入と発達に困難な硬さの土層が、樹勢不良の桜の周りでは地下10cmから、良好な対照区でも深さ30cm



から始まっており、根元に近い表層位置に細根が集まって深い位置に根が広がっていけないことが判った。

九品仏川緑道の植栽地で将来にわたり桜の生育を良好に保つためには全線を通して植栽基盤の改良が必要だと判断した。

●九品仏川緑道 NO.26抜根工事時 緑道土壌断面情報



■ 現状の問題点の整理

| 問題点 | 状況 | 原因 |
|----------------|----|--|
| 樹勢不良 | | <ul style="list-style-type: none"> 踏圧による根回りの締固め(根の窒息) 植栽樹の有効土層の不足(根の発育不良) |
| 樹形の不良(景観不良) | | <ul style="list-style-type: none"> 支障部位や腐朽部の大枝切り戻しによる樹形崩壊 強風による幹の傾斜 日照の偏りによる樹冠の生育不良 |
| 巻根 ・舗装の押し出し | | <ul style="list-style-type: none"> 植え樹形状と成長後の桜の根鉢の大きさの不整合 土壌の硬さ、地中の酸素と水分の不足 |
| 樹冠の枯れ枝 | | <ul style="list-style-type: none"> 根の水分不足、・日照不足 樹冠の接触による病害伝搬 |
| 樹皮欠損 ・幹の空洞 | | <ul style="list-style-type: none"> 腐朽菌による木部の侵食 剪定痕の巻き込み不良、枯れ下がり(樹勢不良による拡大) |
| 害虫被害や腐朽菌被害 | | <ul style="list-style-type: none"> 狭い植え込み空間、密植(樹冠の接触、根の接触で容易になる病虫害伝搬) 樹勢不良による植物自身の防御機能の衰退 |

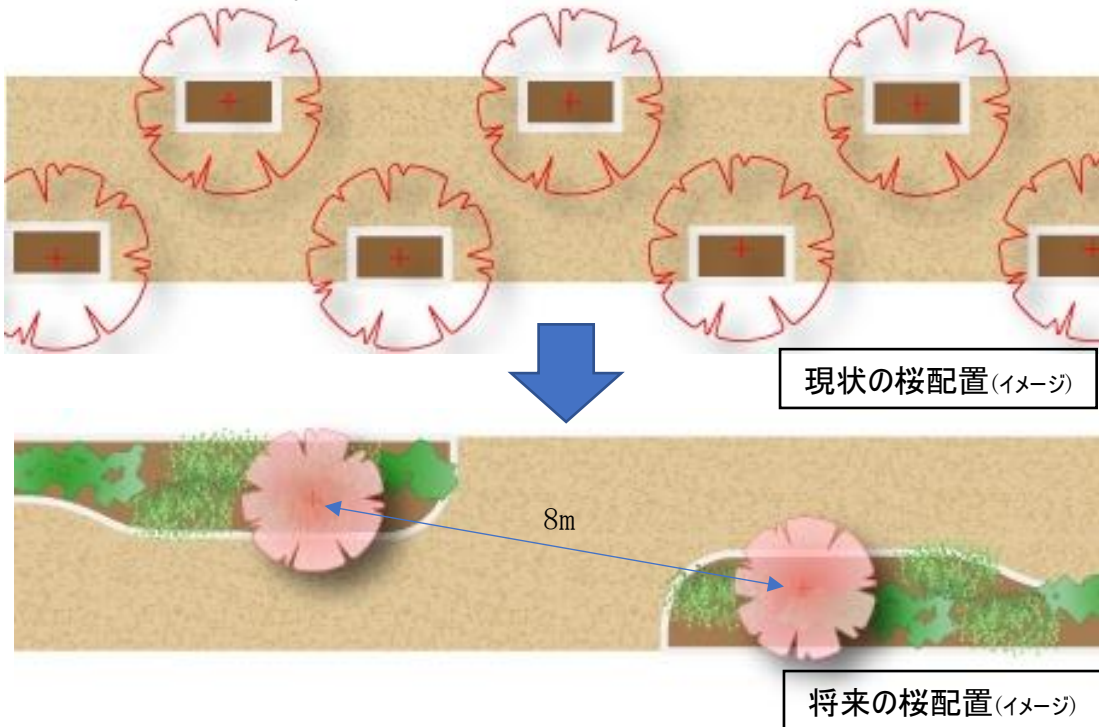
■ 九品仏川緑道の桜の植栽計画

● 植栽品種の選定

大型のソメイヨシノは植栽基盤が浅い緑道空間に適さないため、新規の植栽時はソメイヨシノより小型の品種を選定することとした。ただし、桜の品種は開花を長期間楽しめるように、1~2品種での統一ではなく、ソメイヨシノに似たコシノヒガンやコヒガン、ヤエベニヒガン、遅咲きのベニユタカ、コケシミズ、オモイガワ、色変わりのシロタエやギョイコウの8つの品種を選定した。

● 植栽間隔の確保

現在は、桜同士の間隔が狭いため、新規桜の植栽時は8-10mを植付間隔として確保するよう設計する。



■ 桜並木の将来像

現在植栽されている桜を適切に維持管理して保全していき、倒木などの危険が生じた桜については順次植替えを進めていく。右図のように緑道を3つのエリアに分け、それぞれのエリアの主題が桜の品種の移り変わりで違和感なく連続する印象になるよう将来像を検討した。





①賑わいのエリア（将来像）

ソメイヨシノからコヒガン、コシノヒガン、ヤエベニヒガンの3種に順次植替えを行う。



②落ち着いたエリア（将来像）

ソメイヨシノからコヒガン、コシノヒガン、ヤエベニヒガン、ベニユタカ、シロタエ、コケシミズ、オモイガワ、ギョイコウの8種に順次植替えを行う。



③出会いのエリア（将来像）

ソメイヨシノからコベニユタカ、シロタエ、コケシミズ、オモイガワ、ギョイコウの5種に順次植替えを行う。

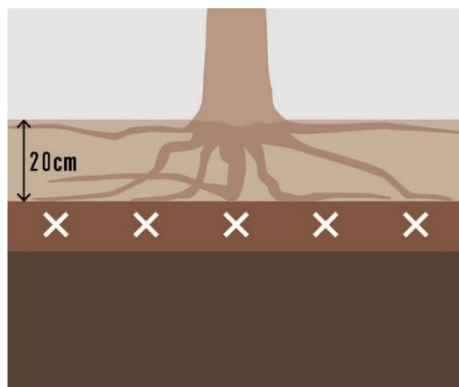
■ 維持管理計画

● 既存樹の基本的な維持管理

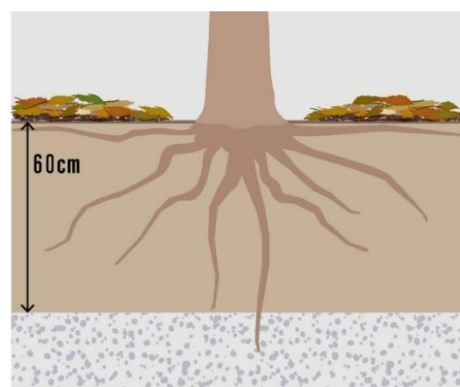
- ・ 樹勢を衰退させない剪定、腐朽予防対策
- ・ 枯枝、支障枝の早期切り戻し
- ・ 現状の植え柵（または根回り）は地表面が固く締まっているので、空気や雨が十分に入るよう土を深さ 30-60cm くらいまで柔らかくほぐす。
- ・ 根と根の間に移植ごてやエアスコップ、下穴あけ器を使って縦孔を数か所作る。完熟バーク堆肥や細粒の緩効性肥料をなるべく深く落とし込み、根を地表ではなく地中深く伸ばすよう誘導する。（根を傷つけないよう注意）
- ・ 冬季、夏季の乾燥期の灌水
- ・ 発生している病害（腐朽、樹皮欠損、樹幹の揺れ・傾斜）の定期確認
- ・ 新たな虫害や病害の兆候確認

● 新植樹の基本的な維持管理

- ・ 十分な保肥性、保水性と透水性をもつ良質客土で植栽土壌を入れ替える。もしくは土壌消毒を行った既存土壌に 10%程度の土壌改良材（バーク堆肥、黒土、燐炭等）と緩効性肥料を元肥として補う。
- ・ 強風時の枝折れや支障枝の迅速な切り戻しと腐朽予防対策
- ・ 成長後の大きさをコントロールするための整枝剪定
- ・ 定期的な点検、早期の異常発見と対処
- ・ 冬季夏季の異常乾燥時にこまめな人為灌水
- ・ 根張りが確保されるまでの支柱の更新と不要時の即時撤去
- ・ 春から秋、根回り 50cm 保護域の除草（穿孔害虫予防、異常の早期発見）



現状の植栽基盤(イメージ)



土壌改良後の植栽基盤(イメージ)

■ 協働作業の考え方と役割分担

● 日常的な点検、観察作業

見守り対象として日常的に緑道の桜を観察し、ささやかな気づきを記録する。これにより、病虫害トラブルの早期発見につながり、施肥や灌水、害虫駆除などを適切な時期や必要な場所から行うことができる。

● 維持管理作業

桜は樹木のため、働きかけの反応に時間がかかる。しかし植物の維持管理作業（清掃や灌水、施肥）の一環を生活の楽しみのサイクルに取り入れるとより良い維持管理に繋がり、九品仏川緑道の景観を向上させることができる。

● 九品仏川緑道桜の PR 活動

桜並木の PR 活動として、桜の観察会や維持管理作業の講習会の開催、桜の生育記録の情報の発信などを行うことにより、世代を超えた桜守同志を増やすことにつながる。